

此界也。懸君。品。
此界也。懸君。品。
此界也。懸君。品。
此界也。懸君。品。
此界也。懸君。品。

漱石全集
第八卷

小品集

昭和四十一年七月二十三日 第一刷發行
昭和五十年七月九日 第二刷發行

漱石全集 第八卷 小品集

定價 二千八百圓

著 者

夏 目 漱 石

發 行 者

岩 波 雄 二 郎



發 行 所

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

目

京に着ける夕

文鳥

夢
十
夜

永日小品

元
目蛇

泥
棒

柿

火鉞

七

一四

三

六三六三六六

六九

七四

七八

行	儲	紀	懸	霧	火	モ	山	人	印	暖	猫	過	下
		元				ナ				かい	の	去	
列	口	節	物		事	リ	鳥	間	象	夢	墓	ひ	宿
					サ								

二二〇	二一八	二一七	二一四	二一一	一〇九	一〇六	一〇二	九八	九六	九二	八八	八五	八一
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----

昔

一二三

聲

一二五

金

一二七

心

一三〇

變化

一三三

クレイグ先生

一三六

長谷川君と余

一四五

滿韓とところぐ

一五三

思ひ出す事など

二七一

子規の畫

三六五

ケーベル先生

三六八

變な音

三七四

手紙

三八一

三山居士

四〇一

初秋の一日

四〇五

ケーベル先生の告別

四〇九

戦争から來た行違ひ

四一二

硝子戸の中

四一四

解説

五一一

注解

五三七

小

品

京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラツトフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間に、一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔の儘である。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。此の淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果迄通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いぜ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乗つて顫へてゐる。

東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身體から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身に養浸み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此の刺激の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛び下りた余は、恰も三伏の日に照り附けられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ様なものだ。余はしゆつと云ふ音と共に、倏忽とわれを去る熱氣が、靜なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と、「遠いぜ」と云つた人の車と、顛へて居る余の車は長き轅を長く連ねて、狭く細い路を北へ北へと行く。靜かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音は狭き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝん、と云ふ。石に逢へばかゝん、かゝらんと云ふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黒い。戸は残りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提燈が見える。赤くぜんざいとかいてある。人氣のない軒下にぜんざいは抑も何を待ちつゝ赤く染まつて居るのかしらん。春寒の夜を深み、加茂川の水さへ死ぬ頃を見計らつて桓武天皇の亡魂でも食ひに来る氣かも知れぬ。

桓武天皇の御宇に、ぜんざいが軒下に赤く染め抜かれてゐたかは、わかり易からぬ歴史上の疑問である。然し赤いぜんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歴史を有する京都に千年の

歴史を有するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因縁で互に結びつけられて居る。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。駄屋町の柵屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提燈である。此の大提燈を見て、余は何故か是れが京都だなど感じたぎり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。實はぜんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか養小豆であるか眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻の迅かなる閃きのうちに思ひ出す。同時に——ああ子規は死んで仕舞つた。糸瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。——提燈は未だに暗い軒下にぶら／＼してゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんからゝんに桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、しきりに馳ける。前なる居士は黙つて乗つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通りを何處迄もかんからゝんと北へ走る。成程遠い。遠い程風に當らねばならぬ。馳ける程顛へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは余が汽車から振り落されたとき居士が拾つて仕舞つた。洋傘は拾はれても雨が降らねば入らぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。

子規^{しき}と來^きたときは斯^か様^{やう}に寒^{さむ}くはなかつた。子規^{しき}はセル、余^よはフランネルの制服^{せいふく}を着^きて得意^{とくい}に入^ひ通^とりの多^{おほ}い所^{ところ}を歩^{ある}行^こいた事^{こと}を記^き憶^{おく}してゐる。其^その時^{とき}子規^{しき}はどこからか夏蜜柑^{なつみかん}を買^かうて來^きて、之^{これ}を一つ食^くへと云^いつて余^よに渡^{わた}した。余^よは夏蜜柑^{なつみかん}の皮^{かわ}を剥^むいて、一房^{ひとつぶ}毎^{ごと}に裂^さいては嚙^かみ、裂^さいては嚙^かんで、あてどもなくさまようて居^ゐると、いつの間^まにやら幅^{はば}一間^{けん}位の小路^{せうぢ}に出^でた。此^この小路^{せうぢ}の左右^{さいう}に並^{なら}ぶ家^{いえ}には門^{かど}並^{なみ}方^{ほう}一尺^{しやく}許^{ばか}りの穴^{あな}を戸^とにあけてある。さうして其^その穴^{あな}の中^{なか}から、もしくと云^いふ聲^{こゑ}がする。始^{はじ}めは偶然^{ぐうぜん}だと思^{おも}うてゐたが行^ゆく程^{ほど}に、穴^{あな}のある程^{ほど}に、申し合^あはせた様^{やう}に、左右^{さいう}の穴^{あな}からもしくと云^いふ。知^しらぬ顔^{かほ}をして行^ゆき過^すぎると穴^{あな}から手^てを出^だして捕^{とら}まへさうに烈^{げつ}しい呼^よび方^{かた}をする。子規^{しき}を顧^{かへり}みて何^{なん}だと聞^きくと妓樓^{ぎろう}だと答^{こた}へた。余^よは夏蜜柑^{なつみかん}を食^くひながら、目^め分量^{ぶんりやう}で一間^{けん}幅^{はば}の道路^{だうぢう}を中央^{ちゆうやう}から等^{とう}分^{ぶん}して、其^その等^{とう}分^{ぶん}した線^{せん}の上^{うへ}を、綱渡^{つなわた}りをする氣^き分^{ぶん}で、不偏^{ふへん}不黨^{ふたう}に練^ねつて行^いつた。穴^{あな}から手^てを出^だして制服^{せいふく}の尻^{しり}でも捕^{とら}まへられては容易^{ようい}ならんと思^{おも}つたからである。子規^{しき}は笑^{わら}つて居^ゐた。膝掛^{ひざかけ}をとられて顫^{ふる}へてゐる今^{いま}の余^よを見^みたら、子規^{しき}は又^{また}笑^{わら}ふであらう。然^{しか}し死^しんだものは笑^{わら}ひたくても、顫^{ふる}へてゐるものは笑^{わら}はれたくても、相談^{さうだん}にはならん。

かんからゝんは長^{なが}い橋^{はし}の袂^{たもと}を左^{ひだり}へ切^きれて長^{なが}い橋^{はし}を一つ渡^{わた}つて、ほのかに見^みえる白^{しろ}い河原^{かはら}を越^こえて、藁^{わら}葺^ふとも思^{おも}はれる不揃^{ふそろひ}な家^{いえ}の間^{あひだ}を通^{とほ}り抜^ぬけて、梶^{かぢ}棒^{ぼう}を横^{よこ}に切^きつたと思^{おも}つたら、四抱^{よかへ}か五抱^{いつかへ}もある大樹^{たいじゆ}の幾^{いく}本^{ほん}となく提燈^{ちとうちん}の火^ひにうつる鼻^{はな}先^{さき}で、びたりと留^{とど}まつた。寒^{さむ}い町^{まち}を通^{とほ}り抜^ぬけて、よくゝ寒^{さむ}い所^{ところ}へ來^きたのである。遙^{はるか}なる頭^{あたま}の上^{うへ}に見^み上^あげる空^{そら}は、枝^{えだ}の爲^{ため}に遮^{さへぎ}られて、手^ての平程^{ひらほど}の奥^{おく}に料峭^{りうせう}たる星^{ほし}の影^{かげ}がきらりと

光を放つたとき、余は車を降りながら、元來何處へ寝るのだらうと考へた。

「是れが加茂の森だ」と主人が云ふ。「加茂の森がわれ／＼の庭だ」と居士が云ふ。大樹を繞ぐつて、逆に戻ると玄關に燈が見える。成程家があるなと氣がついた。

玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顫へながら飛び込んだ客は寒がりである。

子規と来て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乘じて、清水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきものゝ様に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縦まゝに酔はしめたるは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも、黄金と強ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨て、赤裸の儘世の中へ飛び出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる、余は尻を端折つて西國へ出奔する。御互の世は御互に物騒になつた。物騒の極子規はとう／＼骨になつた。其の骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに來たと聞いたなら、圓山へ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、糺の森の奥に、哲學者と、禪居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、一所に、ひっそり閑と暮して居ると聞いた

ら、それはと驚くだらう。矢つ張り氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが「御湯に御這入り」と云ふ。主人と居士は余が顫へてゐるのを見兼ねて「公、まづ這入れ」と云ふ。加茂の水の透き徹るなかに全身を浸けたときは齒の根が合はぬ位であつた。湯に入つて顫へたものは古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら「公先づ眠れ」と云ふ。若い坊さんが厚い蒲團を十二疊の部屋に擔ぎ込む。「郡内か」と聞いたら「太織だ」と答へた。「公の爲に新調したのだ」と説明がある上は安心して、わがものと心得て、差支なしと考へた故、御免を蒙つて寝る。

寢心地は頗る嬉しかつたが、上に掛ける二枚も、下へ敷く二枚も、悉く蒲團なので肩のあたりへ糺の森の風がひやり／＼と吹いて来る。車に寒く、湯に寒く、果は蒲團に迄寒かつたのは心得ぬ。京都では袖のある夜着はつくらぬものゝ由を主人から承つて、京都はよく／＼人を寒がらせる所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭の違棚に据ゑてある、四角の紫檀製の柁に嵌め込まれた十八世紀の置時計が、チーンと銀碗を象牙の箸で打つ様な音を立てゝ鳴つた。夢のうちに此の響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴り已んだが、頭のなかはまだ鳴つてゐる。しかも其の鳴りかたが、次第に細く、次第に遠く、次第に濃かに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、腦のなかへ、腦のなかへ、心の底へ浸み渡つて、心の底から、心のつながる所で、しかも心の尾いて行く事の出来ぬ、退かなる國へ抜け出して行く

様に思はれた。此涼しき鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透して無限の幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の如く冷かでなくてはならぬ。太織の夜具のなかなる余は愈寒かつた。

曉は高い樺の梢に鳴く鳥で再度の夢を破られた。此の鳥はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる鳥ではない。への字鳥、くの字鳥である。加茂の明神がかく鳴かして、うき我れをいとゞ寒がらしめ玉ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、顫へつゝ窓を開けば、依稀たる細雨は、濃かに糺の森を罩めて、糺の森はわが家を遠りて、わが家の寂然たる十二疊は、われを封じて、余は幾重ともなく寒いものに取

り圍まれてゐた。
春寒の社頭に鶴を夢みけり

明治四〇、四、九一一

文鳥

十月早稻田に移る。伽藍の様な書齋に只一人、片附けた顔を頬杖で支へて居ると、三重吉が来て、鳥を御飼ひなさいと云ふ。飼つてもいいと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来る位だから綺麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと頼んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ様な事を繰り返してゐる。うむ買ふよと矢張り頬杖を突いた儘で、むにや／＼云つてゐるうちに三重吉は黙つて仕舞つた。大方頬杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買ひなさいと云ひだした。是れも宜しいと答へると、是非御買ひなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釋を始めた。其の講釋は大分込み入つたものであつたが、氣の毒